

(PDF版・7の2)『教会教義学 神の言葉Ⅱ／3 聖書』「二十一節 教会における自由——二 言葉のもとでの自由」

(文責・豊田忠義)

「二十一節 教会における自由——二 言葉のもとでの自由」 (469-480頁)

「二 言葉のもとでの自由」

起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動を持つ「神の言葉」は、神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて「神の言葉を信じる者に、神の言葉についての証人となるように、人間を目覚めさせる」。この「神の言葉が人間の言葉として人間のところに来るといふ……形式」は、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉、換言すればその「死と復活の出来事」における客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」（客観的な「存在的な必然性」）とその「啓示の出来事」の中での主観的側面としての「復活され高擧されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」（主観的な「認識的な必然性」）を前提条件とした主観的な「認識的なラチオ性」（徹頭徹尾聖霊とは同一ではないが、聖霊によって更新された人間の理性性）を包括した客観的な「存在的なラチオ性」——すなわち、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、聖霊の業である「啓示されてあること」、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）のことである。したがって、その「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）の現存は、その内在的本質である神性の受肉ではなく、その第二の存在の仕方における言葉の受肉であるところの、「神の永遠の言葉がわれわれ人間のために肉となったという出来事についての引続きなされている証言である」。言い換えれば、「神の永遠の〔起源的な第一の形態の神の〕言葉が肉となった〔その内在的本質である神性の受肉ではなく、その第二の存在の仕方における言葉の受肉である〕がゆえに、……〔第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉〔区別を包括した同一性〕」において客観的に存在している〕預言者と使徒たちが存在するのであり、聖書〔その最初の直接的な第一の、「啓示ないし和解」の「概念の實在」、預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」〕が存在するのであり、〔起源的な第一の形態の〕神の言葉は、この〔イエス・キリスト自身によって直接的に唯一回の特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された預言者および使徒たちの〕人間の言葉の形態の中で、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会に属する〕われわれのところに来るのである。このように、

第一の形態の神の言葉と第三の形態の神の言葉の関係は、無媒介的な直接的な関係ではなくて、第二の形態の神の言葉を媒介・反復した媒介的關係である。バルトは、このヘーゲル的に言えば媒介的關係、キルケゴール的に言えば反復的關係のことを、すなわち「間接的な關係性」のことを、「<まこと>の直接性」と規定したのである。「……イエス・キリストにあって人間的な性質と一つになったことの中で始まり、その最初の証人たちが召されたことの中で継続された〔起源的な第一の形態の〕神の言葉の謙讓、自己放棄、卑下」は、「〔起源的な第一の形態の〕神の言葉が、〔第二の形態の神の言葉である〕最初の証人の言葉を通して、〔第三の形態の神の言葉に属する〕われわれを信仰者および証人へと呼び覚ますために、……われわれのところにも来るということの中で完成する」。「人はこの、〔起源的な第一の形態の〕神の言葉が、〔その起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動に基づいて〕われわれのところに来ることを、〔人は、聖性・秘義性・隠蔽性において存在しているキリストにあっての神としての神の不把握性の下にあるが故に、「自分からは神の言葉を知らないし、知ることができない」が故に、キリストにあっての神としての〕神の要求として、われわれに会う命令として、われわれに課せられた律法として理解することができる」。したがって、起源的な第一の形態の「神の言葉の中に……根拠を持つ〔第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復した第三の形態の神の言葉である〕教会の中での人間的な自由」は、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>の中での客観的な「存在的なラチオ性」——すなわち、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の關係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、終末論的限界の下でのその途上性において、絶えず繰り返し、聖書への他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、あの「神への愛」と、「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」という連関と循環において、イエス・キリストのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指して「服従するところに存在する」。

第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とするところの、第三の形態の神の言葉に先行する第二の形態の神の言葉である「啓示との<間接的同一性>」において現存している「聖書的預言者と使徒たちは、ただ単に自分のために生きたのではなく、……〔後続する第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕われわれに向かって語りかけたのである」。したがって、それぞれの時代、それぞれの世紀において、その時代と現実に強いられた第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会に属する「われわれが、〔第二の形態の神の言葉である〕彼らの言葉を〔自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準として〕聞き、われわれ自身の生活圏の中に彼らの言葉を取り入れるということ……が要求されるのである」。「啓示は〔人間的理性や

人間的欲求やによって恣意的独断的に] 例証されようとせず、〔聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準として、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方です〕 解釈されることを欲する」であり、「解釈するとは、別の言葉で〔起源的な第一の形態の神の言葉と〕 同一のことを言うことである」から（イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同の教会」共同性を目指すことであるから）、「そうした解釈が要求されるのである」。何故ならば、その時には、「キリスト教に固有な」類の深化と豊富化、その時間累積が果たされるからである。

「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいた「**神の言葉の三形態**」の**関係と構造（秩序性）の現存は、「われわれの身に及ぶ奇蹟**〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいた「キリスト教に固有な」類と歴史性〕として**理解しなければならない**」。言い換えれば、それぞれの時代、それぞれの世紀において、その時代と現実**に強**いられながらも、「客観的および主観的に〔客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」と、その「啓示の出来事」の中での主観的側面としてのキリストの霊である「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」に基づいて〕比類なき革新〔終末論的限界の下での、人間が人間的に所有する人間の啓示認識・啓示信仰の授与、思惟の転換、「キリスト教に固有な」類の深化と豊富化、その時間累積〕が遂行されるのであるから、奇蹟として理解しなければならない」。第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の**関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復した第三の形態の神の言葉である「教会の言葉〔教会の〈客観的な〉信仰告白および教義Credo〕**」は、「ただ単に〔起源的な第一の形態の〕神の言葉であるだけでなく、またただ単に〔第二の形態の神の言葉である〕預言者および使徒たちの言葉であるだけでなく、〔それぞれの時代において、その時代と現実**に強**いられた第三の形態の神の言葉に属する〕われわれに与えられ、われわれによって取り上げられ、受け取られ、われわれ自身の〔「キリスト教に固有な」〕言葉となる」。したがって、「われわれに向かって語られた言葉」を、全世界としての教会自身と世のすべての人々が、純粋な教えとしてのキリストの福音を現実的に所有することができるために、第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復した第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会に属するわれわれは、全世界としての「われわれ自身〔教会自身〕とほかの者たち〔世〕に向かって……語るのである」。「**もしも**〔第三の形態の言葉である全く人間的な教会に属する〕**われわれが**、〔「神の言葉の三形態」の**関係と構造（秩序性）**に対して〕**受け身でありつづけながら、……**〔起源的な第一の形態の神の言葉を通して、それ故に具体的には第二の形態の神の言葉である聖書を通して〕**われわれに向かって語られたことを、……**〔第三の形態の言葉である全く人間的な教会に属する〕**われわれが**、〔全世界としての〕**自分で**

も自分〔教会自身〕に向かって〔その「語られたこと」を〕語らないとしたら、どうしてわれわれは信じるであろうか。……またほかの者〔世〕に向かって〔その「語られたこと」を〕語らないとしたら、どうしてわれわれは証人であるであろうか。「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリストが、われわれ人間に対して、第二の形態の神の言葉である聖書およびその聖書を媒介・反復した第三の形態の神の言葉である教会の宣教を通して「同時的となる時と所」、『神われらと共に』が神ご自身によってわれわれに語られるところにおいては、われわれは神の支配のもとに入ることを承認し確認する、「世、歴史、社会を、その中でキリストが生まれ、死に、甦られたところの世、歴史、社会として承認し確認する」、「自然の光の中ではなく、恵みの光の中で、それ自身で閉じられ、かくまわれた世俗性は存在せず、ただ神の言葉、福音、神の要求、判定〔「裁き」〕、祝福によって問いに付され、ただ暫時的にだけ、ただ限界の中でだけ、それ自身の法則性とそれ自身の神々に委ねられた世俗性があるだけであることを承認し確認する」。しかし、このことについて、人間の側からは「人間的に言って」、「疑うことができる」し、また「絶望することもできる」。したがって、われわれは、そのことが徹頭徹尾神の側の真実としてのみあるこのことについて、それ故に「成就と執行、永遠的实在として」客観的に存在していることについて、神のその都度の自由な恵みの決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて与えられる終末論的信仰の下で、「常にただ感謝することができるだけであり、……ただ願い求めることができるだけであるところの实在であるということ念頭に置いていなければならない」。新約聖書によれば、「神の恵みの賜物である聖霊を受け、満たされた人」は、「召されていること、和解されていること、義とされ、聖とされ、救われていることについて語る時」、「すでにいまだにおいて終末論的に語る」。ここで、「終末論的」とは、「われわれの経験と感性」にとつての、われわれ人間の感覚と知識を内容とする経験的普遍にとつての<いまだ>であり、神の側の真実としのみある「成就と執行、永遠的实在として」<すでに>ということである。

イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>の中での「存在的なラチオ性」——すなわち、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性におけるその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との<間接的同一性>」において現存している聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準とした「受け身の下での自発性、活動としての神の言葉への奉仕〔聖書に対する他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性における神の言葉への奉仕〕」は、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会に属する「われわれの自己規定、自発性、活動である」。

したがって、そのことは、われわれの生来的な自然的な「**自然的存在……**からわれわれ自身を区別する〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会に属する〕われわれの人間性……の本質である」。したがってまた、そのことは、神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて与えられる「**要求、贈り物、奇蹟**としてだけ理解することができる出来事である」。「もしもわれわれが、それとしてのわれわれの〔生来的な自然的な〕人間的な性質そのものに対して、この奉仕〔「神の言葉への奉仕」〕への能力があるとみなすことができるとするならば、どうしてわれわれは恵みに対して奉仕していることになるであろうか。**起源的な第一の形態の「神の言葉**〔それ故に、具体的には、第二の形態の神の言葉である聖書〕が、「**ただみ子**〔その「死と復活の出来事」における客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」、客観的な「**存在的な必然性**」〕と**聖霊**〔その「啓示の出来事」の中での主観的側面としてのキリストの霊である「**聖霊の注ぎ**」による「**信仰の出来事**」、主観的な「**認識的な必然性**〕の奇蹟の業を通してだけ」、「われわれのところに來る時、そのことは、**神的な要求であり、神的な贈り物……**であるということ……を知るならば、その時、われわれにとっての**悲觀主義的なわがまま勝手さは、まさに樂觀主義的なわがまま勝手さと同様、不可能なものとなる**」。したがって、その「神の言葉が、ただみ子と聖霊の奇蹟の業を通してだけ、われわれのところに來る時」には、更新された「われわれは、この奉仕〔「神の言葉への奉仕」〕をしたがらないその〔生来的な自然的な〕気乗りの無さ全体の中でのわれわれの人間性」を、あの「受け身の下で、自発的に恵みへの奉仕に対して用いず、保留しておくことはできないであろう」。言い換えれば、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会（すべての成員）のその現にあるがままの現実的な人間存在における生来的な自然的な「**自然的存在、その人間性**」は、「**罪深い被造物としてのわれわれ、神の言葉の奉仕に対し能力ないものとしてのわれわれ、自分自身からは実際信仰者でも証人でもなく、また信仰者や証人とはなり得ないところのわれわれ、単に役立たないものとしてばかりでなく、言い逃れの余地のない仕方で逆らう者としての自分、そのように自白しなければならぬ自分としてのその〔生来的な自然的な〕自然的存在、その人間性である**」が、しかし神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて神の言葉が、「われわれをその奉仕に取り上げると同時に、その光に照らす時には」、その更新されたわれわれは、あの「受け身〔聖書に対する他律的服従〕の下で、〔そのことへの決断と態度という自発的服従として〕自発的に、恵みへの奉仕へと向かわしめられる」。したがって、その時には、更新された「われわれは、……われわれの決断、われわれの然りにおいて、受け身の下で、自発的に、恵みへの奉仕を引き受けるであろう」。また、その時には、更新された「われわれの決断に対して、服従の性格、明らかな、清潔な、誠実な、全体的な、まさに絶対的な服従の性格を与えあるいは帰して行くことができるかどうかということとは問われていない」。何故ならば、「われわれの決断の真理性と善良さはただ、そのような決断が、（それをわれわれが信じ証

しることがゆるされる、われわれのために力をもって割って入られる) イエス・キリストの介入と、(それを通してわれわれが信仰者および証人となる) 聖霊の賜物のゆえに出来事〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」〕となつて起こることから成り立っているし、ただそのようなことから成り立つことができるだけである」からである。言い換えれば、その「決断の真理性と善良さ」が、「キリスト教の正しい内容の認識として祝福され、きよめられたものであるのか、それと怠惰な思弁でしかないか」ということは、神ご自身の決定事項であつて、われわれ人間の決定事項ではない。起源的な第一の形態の「神の言葉〔それ故に、具体的には、第二の形態の神の言葉である聖書〕を通して問われているわれわれ自身を問う問い、あるいは決断を問う問いは、われわれの善良さあるいは邪悪さを問う問いではない。むしろわれわれ自身の決断が、(われわれに向かつて語られた言葉の中で、われわれに関して下された) 決断と一致するかどうかの問いである」、「ただこの意味でだけ、われわれは、われわれの自己規定が、自発性が、活動が、問われているのである」。何故ならば、「先ず第一義的に優位に立つ原理」・規準・法廷・審判者・支配者である「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身と共に、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者は、「教会に宣教を義務づけている」その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している「聖書」だからである。

そのような訳で、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会に属する「決断する人間」は、例えば自由な内面の無限性、自由な自己意識・理性・思惟の類的機能を認識し自覚した「他との関係なしにそれ自身で存在している」近代的な「個体」ではない、もっと普遍的実践的に言えば、身体的肉体的および精神的意識的な普遍的で実践的な全自然〔自然の一部としての自己身体、性としての他者身体、外界としての自然〕との相互規定的な対象的活動を行う生来的な自然的な個体的自己としての人間、その肉体的身体的および精神的意識的な人間の類的な活動や生活のことではない。第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会に属する「決断する人間」は、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉の中での啓示の主観的可能性として客観的に存在している、それ自身が聖霊の業である「啓示されてあること」——すなわち、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造(秩序性)に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準として、イエス・キリストをのみ主・頭としたイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指す「キリストのからだにつける肢体としての個人としての人間〔個体的自己としての人間〕のことである」。「聖書の中では、ただ〔生来的な自然的な〕一般的な人間性は、換言すればその

人間的な決断は、……それが人間に対して下された神の言葉の決断と一致するかどうかを問う問いの対象として興味があるだけであるのと同じように」、神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて更新された「個々の人間の特別な人間性も〔人間的な決断も〕ただ、その個人が彼に対して与えられた神的な賜物を受け取り、そのようなものとして用いる態度、在り方を問う問いの対象としてだけ興味がある」。したがって、その更新された「個々の人間の特別な人間性、人間的な決断」は、「全く彼に委託されたタラントの管理人として彼の態度でだけ、マタイ二五・一四以下の譬え話に出てくるあの僕のひとりびとりがどのような僕であるかが決定されるのであって」、換言すれば第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準として、あの「神への愛」と、「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、共同ノ教会」共同性を目指すその度合いでだけ、「キリスト教に固有な」類の深化と豊富化、その時間累積を目指すその度合いでだけ決定されるのであって、「各々の僕の、そのことに先行する〔生来的な自然的な〕それぞれの人間としての在り方において決定されるのではない」。「また全くただ、それぞれ異なった、それでいて互いに関連し合っている霊の賜物を記述して行くことの中でだけ、パウロの書簡の中で（例えばローマ二・三以下、Iコリント一二・四以下、エペソ四・七以下）、ふつう個性と呼ばれるところのことが論じられている」。したがって、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリストにおいては、「われわれ自身の決断は、わたしの決断として、あなたの決断として……理解されなければならない」。第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会のすべての成員の「個人としての人間」（個体的自己としての人間）——「彼らに対して、〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて〕神の言葉は共通に与えられ、彼らは神の言葉をただ共通に受けとることができるだけである」のだが、このことは、「人間イエスも個人であり給い、またすべての証人たちもそれぞれ個人であるというその個人性に対応しつつも、霊的な交わりの中で、換言すればすべてを包括するイエス・キリスト〔三位相互内在性〕における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方、その「死と復活の出来事」における客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」、客観的な「存在的な必然性」と聖霊〔その「啓示の出来事」の中での主観的側面としてのキリストの霊である「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」、主観的な「認識的必然性」〕がひとつである単一性を通して、〔それ故に〕神の言葉、教会、洗礼がひとつである単一性を通して遂行される」。このような、第三の形態の神の

言葉である全く人間的な教会のすべての成員の「個人としての人間〔個体的自己としての人間〕の態度、在り方」に、その個性に、その個の現存性に、その自己史・個体史に、「神の言葉を通して自由にされた良心がある」。このような訳で、もしも第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会のすべての成員の「**個人としての人間**〔個体的自己としての人間〕**のわたし**」が、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「**神の言葉の三形態**」（換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の**関係と構造（秩序性）に連帯し連続する神の言葉**「**以外のほかのものについて語るならば、わたしは神話**〔人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された彼の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者レベルでの神」〕**を語っていることになるであろう**」。